

---

otagonists Of Other Universe    **（元W主人公ファンタジー）**

ミズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Protagonists Of Other Universe  
(元W主人公ファンタジー)

### 【Nコード】

N5946Z

### 【作者名】

ミズ

### 【あらすじ】

更新再開しました。

王都広場に突然現れた人々。

見慣れぬ様相の者達に民衆はパニックを起こす。それは彼等も同じだった。

ここはどこだ？何が起きた？

それは他国でも起こっていた。彼等は一体どうなるのか。

といった感じの男女のW主人公異世界ファンタジーです。  
処女作です。今のところ恋愛要素が入る予定はありません。でも予定は未定。  
遅筆です。よろしければ暇つぶしに一読どうぞよろしくお願いします。

## 01（前書き）

改訂済み。

処女作です。

誤字脱字、不可解な点などありましたら教えて頂けると嬉しいです。

それは雲一つ無い、清々しく晴れ渡った朝の事だった。

群青色の空に陽が昇り空が白みだし、一国の王都城下街を照らす。

小鳥が囀り広場を中心に放射状に拡がる建物や家々の煙突からは煙が立ち上り、城下の人々はいつもと同じ一日を過ごすために忙しく動き始めた。朝食に掃除、洗濯など朝は済ますべき事が色々あるのだ。そのうち仕事がある者、学校がある者は家人に見送られ出掛けて行く。店を営んでいる者達は時間が来ると各々開店の準備を始めていた。

学び舎へ駆けて行く子供、それににこやかに声かけをする老人、夫をキスで仕事に送り出す若い女、既に店を開けて客の呼び込みをする男。

城下の広場が活気づき出した普段通りの朝。

その中で、彼等は何の前触れ無く現れた。

双方の日常が、非日常へと変化した瞬間である。  
広場中の人々が息を飲み口をつぐんだ。

一瞬の静寂。

混乱による場の平和。

風や炎、時間までもがその動きを止めたかのように思われた。

誰かがひく、と声にならない音をもらす。

そしてそれを呼び水にあがった悲鳴が時間を呼び覚まし、凍りついた状況を打ち砕いた。

瞬間、人々はさらに深い混乱、混沌へと突き落とされていった。

これが全ての始まりであった。

## 01（後書き）

途中で投げ出さぬよう、頑張ります。

## 02（前書き）

改訂済み。

エドニア大陸最東端の半島に位置し、タグリスを首都とするカデレイド王国は比較的温暖な上に山海両方に恵まれた土地に築かれている。その風土による恩恵は国に様々な発展をもたらしたがそれ故に、有史以来隣国を主として度重ね行われる侵略戦争によって幾度と無く国境は書き換えられていた。百年前結ばれた講和により終結した大戦以降は半島全土と周囲の諸島がカデレイドの領土となっている。その半島の中心よりやや北にずれた平地に城塞都市であり首都のタグリスはあり、城下街をぐるりと囲む城郭の内側は十字大路で東西南北四つの区画に分かれている。南の区画には王城が、残りの三区画は主に市街地や工業区になる。王城門前で十字大路が交差する点は、巨大な噴水を中央に据える大広場で時間帯によりかなりの賑わいと混雑が起こる。

そんな十字大路を居住区から王城へ向けて走る一台の馬車があった。城から来た迎えの馬車の中で、アリスは瞋目し頬杖をつきながら一週間前の出来事について思索していた。

多分今日アイツと呼ばれたのもこの件についてなんだろうな。あまり難しい話でないと良いんだが、そうはいかないかな。

丁度一週間前の朝、大広場中央に突然現れた数十の人間。見たことも無い異様な服装の者達が不意に降って湧いた様に出現した事に、広場にいた人々はパニックを起こした。そしてそれは向こ

うも同様、否、それ以上だった。

叫び、泣き喚く。もしくは放心状態に。

パニックは直ぐに暴動へと変化した。広場の警邏達では暴徒と化した群衆を抑える事は出来ず、軍の小隊までもが出動する事となった。

術師達による放水が人を散らし、兵士達が暴れる民衆を押さえ込み、異質な者達を捕縛した。混乱に乗じて窃盗を働く者まで現れる始末であった。

部隊によって事態が完全に鎮静化したのは日が真上に昇った頃であり、突然姿を現した者達は捕縛されたまま、軍が王城へと連行していった。

それ以降、彼等が何者でどういった方法で広場に、何故現れたのかといった情報は国から全く開示されず、関わった軍の部隊と国の上層部には箝口令がしかれた。

一部では某国が侵略目的に送り込んできた術師とか何とか陰謀論めいた噂が流れているらしいけれど、まあそりゃ無いだろうな。スパイを朝っぱらに王城前の大広場に送り込むなんて間違いでもマヌケ過ぎる。大体、転移魔法や召喚魔法は不可能だっていうのが近年の魔術権威達の見解だったはず。難しい事は分かんけど。

馬車が緩やかに停車する。もう着いたのかと窓から様子をうかがうと商人達の牛も混じった荷馬車が隊列を作って前の道を横断していた。動きがいやにゆっくりとしているが、先頭がつかえでもしているのだろうか。モウモウと鳴き声が聞こえる。

頭を引っ込め、足を組み直し思考を戻す。

陰謀論は置いてくにしても、他国でも同時刻に同じ事件が起こったという話は本当らしいなあ。こっちも国が情報封鎖してるのか詳しい話が入って来ないからよく知らないが。ふうむ、そろそろ事の詳細が知りたかったから丁度良い。色々聞かせてもらおうじゃないの。

馬車が再び動き出した。道を子供達が笑い声をあげながら走っている。鬼ごっこでもしているのだろうか、横目でそれを追いかける。

それに、彼等の中には子供もいた。どうしているのかも気掛かりだしな。

……しかしさっきから揺れが気になるなあ。

アリスは窓から青い顔を出して御者に声をかける。

「すまないが、もう少しゆっくりと走らせてもらえないか？」

「今日は道が混んでいるので、十分ゆっくりですよ。遅すぎて困っているくらいです」

「……あーそうか、ありがとう」

酔った。

だから馬車は苦手なんだ、気持ち悪くなってきた。

顔を手で覆いボフ、と背もたれに体を預けた。  
王城まではまだ距離がある。

うええ。

## 02（後書き）

W主人公の女の方です。

### 03 海部（前書き）

改訂済み。

### 03 海部

青年、海部は泣きそうになりながら考えていた。

いつもと違う特別な事なんて何一つしてない。狭いアパートの、これまた猫の額の様に狭い玄関のドアノブをひねっただけだ。だのに一体全体どうして俺はこんな所に座ってこんな恐ろしいオッサン兵士に尋問されてるんだろうか？

事は昨日に巻き戻る。

週明け月曜日の朝、海部は会社へと出勤すべくいつも通りに朝食をとった。朝はしっかりと食べて出掛けるのが彼のポリシーである。それは子供の頃から両親が口を酸っぱくして朝食の重要性を説いてきたのと、自立してから試しに食べずに出掛けたみたら昼前に空腹でどうにもなくなっただのが理由だった。民報のニュースで一日の天気を確認しながら歯を磨き、スーツを着た後時間通りに家を出ようとした。

しかし家を出て目の前に広がっていたのはアパートの外廊下ではなく石畳で出来た見知らぬ広場。思わず振り向くがそこに自分の家の重く、開閉するたびにギィギィと鳴るクリーム色の玄関扉は無く代わりに白い大きく立派な噴水がザバザバと水を流し出しているだけである。その噴水を囲むようにポカンとした表情をした人達と同じく立ち尽くしている。少し離れた場所には明らかに日本人ではない恰好をした人々が驚愕の瞳でこちらを見つめていた。

は？

一瞬思考が停止し動き出す。

なんだこれは、どこだここは？俺は寝ぼけているのか？それともまだ夢の中なのか？そうだ夢だ、これは夢だ！早く起きて会社に行かなきゃダメだ。

しかし混乱する頭の隅で、本能が告げていた。

夢なんかじゃない、こんなにも感覚がリアルだ！

でも、じゃあ、ここはどこなんだ？

一瞬がとてつもなく長く長く感じられた。そして。

「うあああああつあああああああああああ！」

俺が、誰かが、悲鳴をあげていた。

その鼓膜を大きく震わせる絶叫が一層この事態が現実である事を海部に感じさせた。

拉致や誘拐をされたのだと思った。

何が起こった？なにがおこった！ナニガオコッタ！？ここはどこだアイツ等は何者だ一体誰が俺をこんな所に連れてきた会社に行かないと逃げない！こわい家の鍵を閉めていないここはどこ？邪魔だどけ気持ち悪い吐きそうだ最後に実家に電話したのはいつだった？

なにがおこった人がたくさんいる子供が泣いてる拉致されたんだはなせ誰だお前は俺に聞くな痛い蹴られた痛てえなにがおこった何が起こった何が起こったナニガオコッタなにがおこったなにがおこったにげないとにげないとにげないとにげないとにげないとにげないと逃げない！！！！

無我夢中でこの場から逃げようとするが多くの人々がこつた返し逃げ惑うので進むことが困難な上に、膝が震えどこに行けば良いかも分からずともするとその場に立ち尽くし座り込んでしまいそうになる。頭の中を様々な事が駆け巡り思考が纏まらない。

「やめてくれやめてくれやめてくれ助けてくれ！！！」

口をついて出てきた咄嗟の叫びはこの場所、人、時間、現実という全てへの否定の叫びだった。

人によって出来た蠢く壁の向こうから強く冷たい水流を浴びせられ人垣が割れる。その先には腰に剣を佩き、兵士の出で立ちをした者達が向かって来るのが見えた。

殺される、捕まったらアイツ等に殺される！

焦りが一層増し、震える体を叱咤して近づいて来る兵士達と反対の方向へ逃げるがやはり人垣に阻まれて抜け出すことが出来ない。後ろに迫ってきた彼等は次々と人を捕縛し縄を掛けていく。人波を必死に掻き分けもがくが、ついに背後から腕を掴まれどうにかして逃れようと暴れるも抵抗虚しく腕を捻られうつ伏せにされ後ろ手に縛られてしまった。

ああ、捕まったもうダメだ！

腕に激痛が走り、目尻から涙が零れる。そのまま目隠しをされ恐怖が増したが歩いて何かに乗るよう命令されたため従う。逆らったらその場で殺されると思ったのだ。もうその頃になると海部は抵抗する気は起きずただただ嗚咽混じりの声で助けを求めているが、やがてそれすらも諦観に似た気持ちで沸き起こりやめてしまった。その後、恐らく彼と同じ状況であろう幾人もの人に乗せられて一杯になったそれはガタガタと大きく揺れながら動き出したのだった。

兵士に言われるがままに移動し目隠しを外された海部がいた場所は暗く湿った空気に満ちた牢屋だった。どこに連れていかれるのかある程度予想はしてたが、やっぱり俺達は監禁されるのか。唯一の光源である壁の松明の火が頼りなく揺れ動き海部の心細さを表しているようである。目隠しを取られた者達が順繰りに牢に入れられていき、全員が入り終わると兵士達は鉄の格子扉に施錠をして開かない事を確認するとそこから入って来たのであろう螺旋階段を上がり姿を消した。

海部は今まで殺されなかった事と直ぐには殺されないかもしれないという安心感を抱くと共に、訳の分からない事態に絶望的な気持ちになりながらその場にヘナヘナと座り込んだ。牢の中には数えるの見知らぬ男女が合わせて二十人、皆まだ比較的若く中にはなんと子供も二人いる。姉弟だろうかお互いの手をギュツときつく握りしめて泣いている。全員がこの恐ろしく突飛な状況に不信と混乱、嘆きが緋い交ぜになった顔になっていた。

アイツ等は子供まで誘拐したのか、一体何が目的なんだ！どうして俺達なんだ！？ここは一体どこなんだ。

出ない答えを自問し頭を掻きむしりながら膝に頭を埋めてうずくまった。

「クソッどこなんだよ、ここはあ」

呟いた言葉が力無く消え入る。

俺がこんな事になつてゐるっていうのは誰か知つてゐるのだろうか。最近実家には連絡をとっていないから親父やお袋は知らないだろう。姉貴は三年前に嫁いで義兄さんの海外赴任に付いて行く時に見送りをして以来、会うどころか連絡もしていない。無事に帰れるのか、良しんば帰れたとして会社はどうなるんだ、無断欠勤か？死ぬ気で就活して二年で首つて笑い話じゃすまねえぞ。俺が来なければ会社から電話はくるだろうが……、あ？

雑な思考を廻らしてゐる途中でふと、気づく。

連絡、電話？そうだ、携帯だ。携帯があるじゃないか！

鞆はどこで落としたか失くなつていたが携帯はスーツの右ポケットにしまつてゐるはずだ。意識するといつもの重みが感じられ途端に希望が湧いた。これで助けを呼べる！両手は後ろで縛られたままだがどうにかなる。冷たい石の床に伏せて体をずってポケットの中の携帯を移動させる。まだもう少し、もうちょっと、出た！突然不審な動きをし始めた海部を見ていた者達もその意図に気づき各々動き出した。携帯が手元に無いのか、何人かは海部の周囲に集まり期待の瞳で動向を見つめる。少し傷ついたコバルトブルーの端末を、動かすことが出来ない手の代わりに靴を脱いだ足で開く。明るく光る画面が顔を照らし、壊れていないことに安堵したがそれはすぐに落胆へと変わった。そこには通信不可を示す圏外の二文字。だが、もしかしたらひよつとしたら繋がるかもしれない、焦る気持ちでキーをプッシュしてから体を折り這いつくばって携帯に顔を近づけた。頼む頼むお願いだ。歯を食いしばり目をつぶり祈る。電話が繋がるようにこれほど強く願った事が今までであつただろうか。

しかし聞こえてきたのはやはり機械的なアナウンスのみであつた。

分かってはいた、だが失望は大きい。

「つながったか？つながったのか、どうなんだよ！？」若い男が震える声で問うが答える気になれず首だけを振ると彼は畜生！と叫び携帯を蹴飛ばしてしまった。

クルクルと回転しながら決して広くない牢の中をそれはすべて行きやがて壁にぶつかり停止する。行方を追った目に入ったのは画面中央一杯のデザイン的な時刻表示で、驚いたことにもうすでに18:26と示していた。

失意の内ではんやりと考える。ここに来るまで随分階段を下った気がする、圏外なのはそのせいだろうか。それともここはやっぱり日本じゃないのか。家を出たのが七時だったから十一時間経っている、捕まる前に見た太陽の様子だとまだ午前中の様だったが。日付が変わってないという事は短時間で俺達は外国に運ばれたのか？

そんなことを考えてるうちに、先程から体が訴えていた疲労が睡魔を味方につけ襲ってきた。抗うことの出来ない程の眠気。

このまま寝て起きたら、やっぱり全部夢だった事にならないかな。淡い期待感を持ち、床に丸まったまま海部は深い眠りに落ちた。

### 03 海部（後書き）

W主人公の男の方です。

## 04 海部（前書き）

改訂済み。

## 04 海部

「起きて、起きてください！」

体を大きく揺すぶられ、海部は目を覚ました。後ろ手に縛られたまま床で寝たため固まった体が、ギシギシと悲鳴をあげ節々が痛い。彼を起こしたのは寝る前に彼の携帯を蹴飛ばした男だった。

男は「来ますよ」とわずか一言を静かに漏らすと格子の向こうの螺旋階段に目を向けた。

階段を下る複数の音が徐々に近づいて来る。ここへやって来る者達など一つしかない、アイツ等だ。いよいよ殺されるのかもしれない、それとも売られるのだろうか。信じがたいが世界には未だに裏で人身売買が横行し、奴隷を持つ者がいるという。そう考えると体が独りでに震えはじめた。歯の根が噛み合わずガチガチと鳴る、呼吸が浅くなり息苦しく涙がにじむ。俺はどうなるんだ。

コツコツ、コツコツと音が大きくなり、やがて兵士の姿をした男達が現れた。どう見ても日本人ではない、やはりここは外国か。

俺達をどうするつもりだ、そう口に出そうとした時だった。

「これからお前達を一人ずつ順に取り調べる」

そう兵士が告げた。

は、取り調べる？という事だ、臓器が売れる状態かどうか調べるってことか？

自分がした想像で体がブルリと大きく震えたが、同時に違和感に気がついた。そういえば相手は日本語を喋っている、しかも片言などではなく流暢にだ！よくよく思い出してみれば広場で逃げ回った時も周りは皆日本語を話していた。なんでだ、やっぱりここは日本なのか？しかし現代日本にこんななんちゃって中世ヨーロッパ風の者達が剣を腰に帯びて存在している訳が無い。大体気づかないうちに誘拐されたにしたらってあの広場に居た理由が分からない上に広場の

人間は俺達を恐れている様だった。ますますもって分からない。

「まず、お前からしよう」兵士が指差したのは海部を起こした若い男だった。彼の表情が凍りついたが相手は構わず扉を開けて腕を掴むと引きずる様に階段を上っていつてしまう。彼の瞳は必死に助けを求めていたが海部は声を出すことも出来なかった。次は自分かもしれないどうなるかも分からない。彼はちゃんと無事に帰ってくるのか、お願いだ誰か助けてくれ。

座り込みだけ祈っていただろうか、やがて再び階段を下りる音がしたが彼の姿はなく兵士だけが戻ってきた。なぜだ。

「彼はどうした、何をしたんだ!？」

まさか殺されたのか!

格子に近づき勢い込んで聞くが答えはない。何がどうなっているのだ!

「次はお前だな」牢に入つて来た兵士はそう言うと言答無用で海部を立ち上からせ引つ張つて行く。

本当にもう駄目かも知れない、どんな恐ろしい目に遭わされるのだろうか。親父、お袋、姉貴!

連れられて階段を上つて行くと木製の扉のある階に行き着いたが階段はまだ上へと続いていた。兵士が扉をノックしてから開くと中には机と椅子が二つ、向こう側の椅子には怖面の老兵が腰掛けている。海部を連れてきた兵士は彼に座るように命じると扉の前に移動した。逃げられないようにするためだろうか。

そうして現在、海部は老兵と対峙していた。

「これから君の取り調べを始める。正直に答えるようにな」羊皮紙の様な紙と羽ペンを準備すると老兵は低い声で静かに声を発した。下手な受け答えをしたら殺されるかもしれない。何を問われるのか、唾液を燕下するとゴクリと喉がなる。

「まず名前は？」

こいつ等は俺の名前などを知って何の意味があるのだ。　「海部俊直」かいふとしなお

「カイトシナオ、変わった名だな。さてカイトよ」

獅子が獲物に狙いを定めたような鋭い眼差しは老練さを感じさせる。

「この国の出身ではなさそうだが君達はどこからやって来た？これは立派な不法入国だ」

一呼吸置いてからさらに続ける。

「君達が突然広場に現れた事に民衆は大きく動揺した、一体どのような手を使った？何が目的なのだね？」

フホウニユウコク？

言っている意味が分からない。

一瞬で頭に血が上がり、怒りが恐怖を押さえ付け素早く頭をもたげた。  
「ふざけるな！」

叫ぶと同時に椅子を蹴って立ち上がる。椅子が大きな音をたてて倒れ、立ち上がったと同時にふらついて机の縁に腰を打ちつけ痛みを感じるがかまわない。

「不法入国？お前らが俺達をこんな所に連れて来たんだろうが！そっちこそ人を拉致して何が目的だ、とぼけるんじゃないぞ！！」

「座れ」

兵士が叫ぶ俺を押さえ付け、老兵が静かに命じてくるが従ってなどやるものか。

「帰せ、俺を家に帰せ！けどな、戻ったらただじゃ置かないからな。泣き寝入りなんか絶対にしないぞ！！！」

ここまで言ってしまったのだ、絶対に殺される。ならばその前に一矢報いてやる。柔道黒帯の姉貴仕込みの大外刈を喰らわせてやろうと脚を持ち上げた時だった。

「座れ！」

地を這う様な低くしかし迫力のある一喝を受け、思わず固まってし

まう。従ってしまった事に悔しくなつて唇を噛みしめる。

「座れ」三度老兵が繰り返すと兵士が無理矢理に彼を椅子に座らせた。

「先の男アベと言つたか彼も同じ様な事を言っていたな、我々が君達を誘拐したと。しかし名誉の為に断つておくが誓つてそのような事は無い。我々は治安の維持のために広場を騒がせた君達を捕らえたまでだ」

「元より我々は君達を然るべき措置をとつた後に出身国へ強制送還するつもりであつた。そちらが速やかに帰国したいと願うのであればその手伝いをする事はやぶさかでない」

「だが我々も君達がどのようにしてこの国に侵入したのか調べねばならない、何度もこのような事があつては国信にも関わる。協力してくれるかね」

この男が言うことを信じても良いのだろうか。嘘を吐いている様には見えないが、この老兵にとって自分のような若造を騙す事など容易な事かもしれない。だが相手は俺達を帰してくれると言っている、もしかしたら誘拐犯は別にいて俺達はあそこに置き去りにされただけなのか。

ならば、「俺より先に行った彼が戻つて来なかったのは、なんでだ？」殺したのでないのなら。

「彼は君と同じように暴れたときに転倒してね、頭を机で打ち付けて怪我をしたので治療しに行かせたのだよ」  
なるほど、それを聞いて少し安心する。

「分かりました、一先ず信用しましょう」  
海部は椅子に座り直し言つた。

そして、

「とりあえず、もう暴れないんで縄を解いて貰えませんか。痛くて限界なんです」

城に着いてから、酔いも限界半死半生の体のアリスは謁見の間ではなく客間へと通された。

ヨロヨロと足を運び、勧められた赤いベルベットの立派なソファに腰掛ける。紅茶と茶菓子を用意され、主が来るまでしばらく待つように述べるので呻くように礼を言うところまで案内をしてくれたメイドは一礼した後に部屋をあとにした。

それを見届けた彼女は出された紅茶をよけると、それらに手をつける事なく腕に顔をうずめテーブルに突っ伏す。

「ううえ」

気持ち悪い。死ぬ。吐きそうだ。

しばらくそうして、ようやく酔いも治まり冷めた紅茶に口を付けはじめた頃に扉のノック音の後に城の主が姿を現した。

「やあ久しぶり、元気だったかい？待たせたね」

「元氣も糞もあるか、迎えの馬車なんかを超越してからに。アタシが馬車酔いしやすいのは知っているだろう！」とりあえず噛み付いておく。

「いやすまなかった、もう平気になったかなと。第一、こちらが呼びつけたのに迎えの一つも送らないのは失礼に当たるかと思っ  
てね」「だったら次からは上等な馬でも鞍を着けて遣わして頂きたいな。乗馬なら平気だから」

「了解だよ」

相変わらずだねと笑い、頭をかきながら席に着く若き王。

三年前、弱冠二十三歳という若さで王位についたアーサーである。実は次男であり十歳年上の兄がいたが、その兄は四年前に流行り病

に罹り生来の身体の弱さも祟り若くして死去。嫡男を亡くしたシヨックと心労により父である前王も病に倒れ間もなくこの世を去った。王位など関係ないと考え、与えられた地方の領主として腕を振るっていた彼にとつてはまさに青天の霹靂。兄に後継ぎも居なかったため、あれよあれよという間に王として君臨する事となった。

成人する前は見聞を広めるために世界を旅して廻り、アリスとはその時出会い旅を共にした仲間の一人であった。

「それで、相談つていうのは？」

本題に入ろうとしたアリスを彼は手で制して言う。

「ルキウスも来るから話はそれからにさせてくれないか」

「ルキウスが？アイツが来るの？」

思わず頓狂な声をあげてしまった。

「うん、相談があると手紙を送ったら珍しく早々に返事を送ってきたよ。学会の発表もこの間終わったようだからね、いつもより時間が空いているんだろう」

なるほど、と頷いてみせる。

名のある術師であるルキウスは一度研究に没頭すると一ヶ月は平気で研究室に籠りつきりになる。また、興味を持った事のためならばどんな遠隔地にでも自ら赴いて行ってしまう。そのため会おうとしても中々会えないのだ。以前、アリスが訪ねて行った時に彼に師事している研究生が伝承の聞き込みや簡単な研究サンプル採取程度の事なら自分達が行くから書き置きだけを残して出歩くのを止めて欲しいと泣きついているのを見たことがある。そんな彼もまた、旅の途中に出会った仲間だ。

そしてその時一緒に行き会った、

「リズは？」

「エリザベスは掴まらなかったよ。一月前に家の者に南の諸島に行くと言いきり残して出掛けて行ったらしい」

「彼女らしいな」

「そろそろ戻って来る頃だろうから、帰り次第連絡をくれると彼女のお母上が返事を下さったよ」

エリザベスも術師ではあるが、医師としての意味合いが強い。

医術の名門家の三女である彼女は回復魔術や医療を研究している。

彼女も知的好奇心を抑えることなくあちこちへと飛び回るのでルキウスとは知己の仲なのだ。

「そういえば婚約した事を手紙でしか祝って無かったね。公爵家の長女だったかな、おめでとう」

「ああ、ありがとう。まさか王族の自分が恋愛結婚なんて出来ると思ってたかったよ」

「良かったじゃないか、お相手の噂も良いお話ばかりだしね」

「君の方こそどうなんだい？」

「ぼちぼち、といったところだよ。お前が作ってくれた制度のお陰で子供達には前よりマシな、並の暮らしをおくらせる事が出来る。そりゃあ、富裕層みたいに娯楽費や嗜好品にお金をかけてはやれないけど皆元気だよ」

感謝の意味をこめてアリスは笑って見せるがその笑顔は次の言葉を聞いてすぐ渋面が変わった。

「それは良かったけど、孤児院の話ではなくてね。君は結婚しないのかって事だよ」

げっ、出た！最近はどこへ行っても必ずという程皆聞いてくる！！  
「それ次聞いたら遠距離から毒矢で射ってやるから」

「あっはは。アリスの矢は必ず当たるし、まだ後継者も居ないから

それは困るなあ」

お互いを信頼しているからこそ言える冗談である。

「王族としては遅い婚約なんじゃない？」

「まあ、父上は結婚は好きにして良いとおっしゃっていたから許嫁はいなかったし。旅に出たり王位についたり機会が無かったというか」

頭をかきながら笑う。彼の癖だ。

「何にしてもおめでたいよ」

「結婚式には来賓席を用意して招待するから是非来て欲しいな」

「馬の単騎駆で式典中に城の正門から伺うよ」

冗談である。

二人で近況を報告しあい談笑していると、

「おや、お待たせしたようで？」長い黒髪を一つに束ねたヒヨロリとした男が客間へと入ってくる。

「ルキウス、ノックをしる。ノックを」

「久しぶりだね、ルキウス」

アーサーが笑顔で手を挙げて迎え入れる。

「すまない、箆ってばかりいるとどうにも礼儀作法に疎くなってしまつてね」

席に着くと茶菓子を指差して一言。

「頂いても？」

アーサーは笑って頷く。その間にも紅茶のカップにはボツチャンボツチャン、と角砂糖が次々と躊躇無く投下されていく。果たしてあの砂糖は全て溶けきるのだろうか。

コイツも相変わらずだな。

二人はその様子に苦笑しながら顔を見合わせるのだった。

「さて、人も揃ったし落ち着いたところで話を聞かせて貰おうじゃない」

「我々に何の相談かな。一週間前の出来事についてではないかと大体当たりを付けているんだが？」

「その通りなんだが、相談というか何というか。……変な話でねえ」

いやに歯切れが悪い。

「二人はあの時広場には居たのかい？」

ルキウスが首を横に振った。

「アタシは朝市の帰りだったから、居たし見た。あの時は本当に驚いたもの」

孤児院の子供達も連れていたので何が起こるか分からないあの場から早く立ち去ろうと大変苦労した。

「件の者達は何者だったのか、私も興味深いのだよ。現れた方法もね」

ルキウスが続けて、アリスが頷く。

「ううん、それがねえ」

アーサーはほとほと困ったという顔をして見せた。

「なんなの、サッサと話してみろ」

せつつくと頭をかきながら彼は唸り、一言口にした。

「異世界って信じるかい？」

## 06 海部

海部の縄を解くことに老兵士ははじめ難色を示した。それは海部が実際は何者かに送り込まれた間者や暗殺者である可能性や、そのため何らかの方法で自殺を図るかもしれないからであった。海部からしてみればとんでもない話である。彼は今のところ自分や現実に対して死にたくなるほど悲観した事は無かったし、無事に帰って元の日常に戻るのが最たる願いなのだから。結局は縄を解かれ、必死でいかに自分が無害であるかを説明したことが功を奏したのだ話し合いはやはり大事なのだと思っただが、その実は自害するならば捕まった時点で舌を嚙んだらうし、例えば海部が死んでも他の者に話を聞けば良いといういつそ残酷な老兵士の考えからであった。

老兵士はキースと名乗った。

これでもう、事情を話せば後はキースの国が自分達を日本に送り届けてくれる。元の日常に戻ることが出来るはずだ。帰ったらまず実家や姉貴に電話するんだ、海部はそう考えたがその計画は早々に暗礁に乗り上げる事となった。

「ではもう一度聞くが、君達はどこの国の出身なんだね」

その質問に対して、痛む腕の付け根を押さえながら海部は答えた。

「日本です」

「ニホン？」

「そう、日本。Japanですよ。そうだ、日本大使館とか領事館に連絡してくれますか？」

「ニホン大使館に領事館？そんなものは無い」

「え、無いんですか！？」

そうか、こんな前時代的な格好をしている人達がいる国だ日本とは国交がまだ無いのかもしれない。でもそれだったら何で日本語を話しているのだろうか？

「ううん、無いんですか。どうしたら良いんだろっ、とにかく俺は日本出身です」

そう言っくとキースは顔をしかめた。

「ニホンとはどこにある？」

これには海部は心底驚いた。

「知らないんですか！アジアの東にある世界屈指の先進国ですよ！？」

「知らん。我が国はオベルガント連邦と世界一、二を争う国で多くの他国と国交を結んでいる。君の国が先進国なら知っているはずだ。そちらが勝手にそう思っているだけだろう」

「オベルガント連邦？世界の大国と言ったらアメリカでしょう？そんな国知らないですよ。大体ここはどこなんですか！」

「カデレードの首都タグリリスだ」

「どこそれ」

今度はキースが驚く番である。

「知らんのか！エドニア大陸のカデレードだぞ、一体どこの未開の地からやって来たというんだ」

「失礼だな、未開はそっちじゃないか！第一にエドニア大陸なんて無い！！」

「なんだとふざけるな！」

お互い額に青筋を浮かべ怒鳴りあったキースと海部は見張りの兵士に宥められればつが悪くなり押し黙ってしまった。

少し落ち着いてから海部が口火を切った。

「あーとりあえず、お互い場所を確認しましょう」

「……………そうだな。おい、地図を」

キースが一言命じると見張り兵士の一人が部屋を出て行く。

その様子を見ながら、海部は自身に少し驚いていた。

自国を未開の地呼ばわりされて自分がこんなに怒ると思わなかったな。先進国の生まれな事を少し誇りに思ったことはあったけど日本に対して何かを考えたことはあまり無かった。これが愛国心ってヤツなのか？難しい。

兵士はすぐに大きな地図を手に戻ってきてキースに渡し、彼は机いっぱいにそれを広げる。

「ここがカデレードだ。ニホンとはどこにあるんだね？」

地図上右側の大きな半島を指差してから彼は海部に問うた。

しかし、海部は一言も答えられなかった。もちろん日本の位置が分からない訳ではない。

「どうした、早く答えないか。まさか世界地図を見たことが無い訳ではないだろう」

「そうい、うことじゃなくて」

いや、彼の言ったことはある意味正しかった。こんな世界地図は見たことが無い。日本はおるかユーラシア大陸、アメリカ大陸さえもその地図には無く、およそ海部の知っている世界ではなかった。大まかに説明するとその地図には南北に分かれた大きな大陸と大小様々な島が描かれていて、キースは北大陸の最東端の半島をカデレードだと言った。

「何、これ」

カラカラに渴いた口が漏らした本当に小さな呟きは震えてかすれていた。

どういうことだ、やっぱり俺はコイツ等に担がれてるのか？俺達を帰す気なんて無いのか？疑念が再び沸き起こる。

「何故何も言わない」口を閉ざしたまま何も語らぬ海部に痺れを切

らした様に聞いてくる。

「やはりニホンとは嘘か。それとも答えてはならぬと上に指示されているのか？」

言われた意味が分からず地図から顔を上げた。

「元々我々は君達が他国からの間者なのではないかと考えている。君達があくまで何者か答えないと言うのであればこちらにもそれなりの用意があるぞ」キースの声が再び鋭くなる。

「ち、違う。違います！そんなじゃない！！」

相手は本気だ、海部は慌てた。嫌な汗が背中を伝う。

まさか。そんなまさか。

「に、日本が無い！」

「ニホンがない？描かれていないという事が、そんな小さな国なのか？」

「そうじゃない、そうじゃないんだ！」

これではまるで駄々をこねる聞き分けの無い子供の様だ。海部は足元から暗い穴が広がって、大事なものの全てがその中へ飲み込まれていつてしまう様な気がした。それらをなんとか取り戻そうと必死に叫ぶ。

「こんなの世界地図じゃない、俺の知ってる世界じゃない！」

まさか、そんな馬鹿なこと！

そんな事が起こるのは創作の中だけだ！

先程頭をよぎった嫌な想像を振り払おうとするが、それは叫んで威嚇すればする程海部を嘲笑いながら近付いてきた。

「カイク、何を言っている？落ち着いたらどうだ」

「これが落ち着いていられるもんか！」

なんでだ？帰れると思ったのに！

「君は先程誘拐された等と言っていたがそれで少し混乱しているのではないかね」

「してないし俺は正気だ！」

視界が歪んだ。それとも俺は狂ってしまったんだろうか。本当はちゃんと現実にいるのに幻覚でも見ているのか、さもなくば今いるのが現実で今まで信じていたモノが全てまやかしかったのか。

溢れた涙が次々と頬を伝い滑り落ち、呼吸に嗚咽が混じった。顔を覆った両手の平の隙間から救いを求める声がこぼれる。

「助けてくれ、助けてくれ助けてくれ助けてお願いだ」

噁り泣く海部を目の前にキースは困惑した。聞いたことも無い国名を上げその出身だと言い、示してみると地図を見せたら今度は自分の知っている世界ではないと泣きはじめた男の相手をどうすれば良いかなど彼には全く分からなかった。

「君は、どうやら、疲れている様だな」一語を選びながら言葉を発する。一体何が海部をここまで追い詰めているのか分からず、ある意味恐怖した。

「君から話を聞くのはまた後にしよう、戻りたまえ」

兵士を一瞥し連れていくように命じる。

「だがカイフよ、もう一度言っておくが我々は君達を国に帰す事に關しては協力を惜しまない。覚えておきなさい」

海部はそんなキースの言葉をどこか遠くで聞きながら泣き続けた。

攪拌された世界がグルグルと混ざり合い立っていられない。

牢に戻ってから数人が何があったか聞いてきたが答える事など海部には出来なかった。その後も鉄格子の扉が何度も開閉され、その度

に牢の中にむせび泣く声が増えた。

ああ、もう。

何も考えたくはない。

## 幕間

「報告は以上です」

キースは今し方読み上げた紙をクルクルと巻き取ってから上官に差し出した。

「結局彼等が何者かは分からなかった、という事か」

「はい」

「陛下になんと申し上げれば良いのだ」

椅子に腰掛けて報告を聞いていた男は深くため息をつき、キースを労うと下がるように命じる。キースが一礼して退出するのを見届けると部屋を訪ねて来ていた別の男が口を開いた。

「甚だ信じがたい話だ、存在しない国の者だなど。奴等の言う事を信ずる証拠などどこにも無いではないか！」

声を荒げて主張する。

「間者の可能性が拭われぬのならば、拷問にでも何にでもかけるべきだ。そうは思われぬか、オースター殿！」

呼ばれた男、オースターは眉間にシワを寄せて呻いた。

「そう、あまり怒鳴られるな。拷問して話が済むならば私とてそう

したいが、事はそれだけでは納まらぬ」

「何故!？」

「まず神殿側の一部が彼等を神の御使い、使徒ではないかと言いつけている」

「使徒を傷つけるべきではないと？」

「そうだ」

「今や形骸化して行事を司るしか能のない奴等が何を言い出す。大方己等も本気で言っているのでは無く、どうにかして権力を復活させるための道具にしようと考えているのだろう」

フン、と鼻を鳴らし

「恐るるに足らん!」と言った男に苦笑してオースターは続ける。

「それだけではない」

そこから彼の声色が変わった。

「これは先程入った情報だが、どうやら他国でも同じ事件が起きているらしいのだ」

「なんと!」

「万が一拷問で彼等を死なせてしまった場合、そして彼等に本当に罪が無かった場合、他国からの我が国の地位と印象は大きく揺らぐ。またそれにこじつけて戦争を仕掛けて来る国も現れるかもしれん」

「ではどうしろと言っただ！」

「それが分からぬから困っている」

オースターは席を立ち上がりながら言った。

「先ずは報告、そして皆を招集して話し合うしかあるまい」

「私も貴殿もしばらくは忙しくなりそうですね」

笑ってそう言うのと、男は息を詰まらせ顔をしかめた。

「我輩、休暇を取って近々旅行へ連れて行ってやると妻と娘に約束してやったばかりなのだが」

「私も似たようなものだ」

そうして二人は部屋を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5946z/>

---

Protagonists Of Other Universe （元W主人公ファンタジー）

2012年1月14日15時51分発行